

戦争の悲しみを永遠に語り続ける人

大原勝人詩集『泪を集めて』に寄せて

鈴木比佐雄

1

大原勝人さんが第二詩集『泪を集めて』を刊行した。第一詩集『通りゃんすな』から五年半ぶりの詩集だ。大原さんは一九二六年生まれだから、八十六歳を迎えているが、この第二詩集の原稿を読んで、その詩的言語の表出するエネルギーは、より力を増しているように感じられた。それはきつと大原さんには書き残さなければならぬ、決して譲ることの出来ない痛切なテーマを抱えているからだろう。私の父は大原さんよりも三歳ほど上だが、中国戦線に送られて部隊の半分以上が死亡し、ようやく生き残って帰国した。しかし戦

争のことはほとんど語らないで、酒の飲み過ぎで肝臓を悪くして六十歳代で死んでしまった。父の世代は、多くの下級兵士として異国で死んでいった日本の歴史上でも最も悲劇的な世代といえるだろう。大原さんも戦争に駆り出された父の世代の最も若い兵士であった。その意味で大原さんは、戦争を体験している世代の最後の語り部として自覚をしているに違いない。日中戦争と第二次世界大戦を含んだ十五年戦争を引き起こした日本人は、根源的にその本質的な問題点や克服すべき課題を抉り出し、現在に至るまでの戦後社会の中で、それを克服できたのだろうか、という重たい問いを大原さんは一貫して問い続けている。その問いの重さが今回の詩集を生み出した原動力になって来たのだ。第二詩集が出る前に日本は東日本震災・福島原発事故に遭遇し、その苦悩を抱え込んだままで出口は見出せていない。それどころか日

本は世界の国々からその内向きの姿勢を非難されて、構造的に地盤沈下していることはまぎれもない事実だ。その意味でも大原さんの詩篇を読むことは、日本の戦後詩の原点を想起させるだけでなく、内向きになった日本人が世界の人びとを直視し、新しい世界を構築していく可能性を感じさせてくれる。

2

新詩集『泪を集めて』は、一章「泪を集めて」、二章「残照」、三章「七色の林」の三十三篇からなっている。一章「泪を集めて」十一篇は、戦前・戦中だけでなく戦後間もない頃の大原さんの貴重な体験を基にした詩篇群だ。また3・11以降に感じた痛切な思いも記されている詩篇もある。

冒頭の詩「汽笛」は、三つの時間が重層的に重なっている。一つ目の場面は街の公園に置か

れるようになった蒸気機関車を孫娘と一緒に見に行く場面から始まる。その汽車を前にして大原さんは、二つ目の場面として十五歳の昭和十六年（一九四一年）にタイムスリップしていくのだ。神戸の造船所に就職の決まった大原さんを校長先生と両親が別れを惜しんで見送ってくれた時のことだ。三つ目の場面は、昭和二十年三月に大原さんが入隊する際に村人たちや母が叫び声を上げて駅で見送っている。大原さんの蒸気機関車を見る視点は、昭和の歴史を走馬灯のように垣間見せてくれ、戦争に翻弄された民衆の歴史的時間を体現した詩だ。

二番目の詩「母の乳房」は戦死した兄に触れた詩だ。兄は俳優志望だった若者だったそうだが、兵士として南太平洋のブーゲンビリア島で昭和十九年に死亡した。戦友が昭和二十一年七月にやってきて、密林に逃げ込み空爆されて死んで

いった兄の最期を母に伝えたという。母は半狂乱になり胸をはだけて乳房を与える格好で兄の死を悲しみ誰も慰めることは出来なかったそうだ。この戦死を聞いても毅然として耐える母ではなく私には、大原さんの母の姿が子を亡くした母の本当の姿を伝えていると感じられた。

一章の詩の中でも三番目の「火の路地——大阪大空襲三月十三日」は、大原さんが第一詩集で書きえなかつたと言っていた大阪大空襲を記した詩篇だ。大阪大空襲は、三月十三日の未明から始まる一回目の空襲で、B29二七四機が低空飛行で大阪市の北区、西区、浪速区的一般家屋に焼夷弾を落とし、約四千人が死亡し十三万六千戸を焼き尽くした。その後八月十四日まで八回も空襲は続いて死者・行方不明者は一万五千人を超えて甚大な被害を与えた。大原さんはその初回の最も激しかった大空襲に遭遇し、「街は熔鉱炉と化して紅

蓮の炎を巻き上げる」と書き記している。この詩はコールサック社が二〇〇九年に刊行した『大空襲三一〇人詩集』に「炎の裸馬と少年」という題で収録された詩篇で、書き得なかつた大阪大空襲を後世に伝えようと試みたのだった。火の中を狂ったように裸馬が走り抜け、七、八歳の少年が「火の路地に消えて行く」光景を大原さんは決して忘れることが出来ないのだ。また大原さんは大空襲を前にして無力な兵士たちの虚勢の言葉も書き留めている。

詩「中蓋の飯——女子挺身隊員と兵士」もまた戦争末期の初年兵の視線で書かれている貴重な詩篇だ。昭和二十年六月に大原さんの部隊は満州へ渡る予定だったが、爆撃や機雷によって宇野港で足止めされる。その際に町の国防婦人会から中蓋に盛られた炊き出しの米麦大豆の混合食が渡された。初年兵たちは同じく足止めされている女子挺

身隊員が昨夜から何も食べていないことを知り、その「中蓋の飯」を差し入れする。乗船するため初年兵たちと女子挺身隊員たちは一期一会の出会いであり二度と会うことがないと確信しながら波止場で別れていく。このシーンは大原さんの詩の特長であるドラマチックな感動を静かに語っている。何か「中蓋の飯」という言葉が食べ物を越えて、何かとても温かい親愛の言葉になって、若い兵士と女子挺身隊の間を行き来しているようだ。

3

その他の一章の各詩篇も大原さんしか書けない歴史的な視線を持ち、戦争の悲劇などのテーマに取り組んでいる。「独りぼつちの戦死者」は、腕組をしていただけで不敬罪だと言われ見習士官から拷問されたことで病になり、戦後に死んでいった青年の話だ。失意の父が息子の骨を食べるの

は壮絶な悲しみを表現している。詩「蟬の慟哭」、戦場で死んでいった息子たちを偲ぶ詩篇だ。詩「望郷の笛」は、中国黒龍江省伊春で慰安婦隊と呼ばれていた「従軍慰安婦」たちが集団自決した跡の墓に寄せて書かれた詩篇だ。詩「道」は、今は舗装化された田舎道の下に存在したデコボコ道を想起して、自動車の疾走する現在がどこに向かうかを思いやっている詩篇だ。詩「漂流する船」は、日本の政治・経済・社会の動きが戦争放棄を記した憲法を軽視し、アメリカの核の傘に頼り、民衆の平和への願いを踏みこじって何処へ向かおうとしているのかを憂いている。このような詩篇は大原さんが戦争体験を持ち、その悲劇を知っているからこそ説得力がある。一章の最後の二篇「海辺に立つ人」と「泪を集めて」は、東日本大震災・福島原発事故の3・11以降の状況を踏まえて書かれた詩篇だ。大阪大空襲を目撃した大原さ

んは、今の地震津波の被災者や放射能被害難民の姿を前にして、「潰れるほど握り締めた拳の上に流した泪／悔し泪は流れるだけ流すがよい／共有する泪を掻き集めて立ち上がる」と告げる。その言葉は底の浅い同情ではなく、被災者や難民たちが自らの足で立ち上がることを促す本当の助言だと思われる。その意味で大原さんの詩篇のメッセージは、時代の中で本当に生きたものだけが流す泪を見詰めて、その「泪を集めて」次の時代を作っていくこうと言う力強い言葉だと私には感じられた。

二章「残照」十篇は、戦後の経済社会の中で翻弄されてきた働くものたちへの深い同情や家族や友人・知人たちの鎮魂の思いなどの詩篇だ。三章「七色の林」十二篇は、故郷の福山や近畿・中国の地域の歴史に根ざした詩篇、また大原さんは長年にわたって婚礼家具など重厚な手作り家具を

製造・販売していた関係で仕入れなどを兼ねて海外旅行に行った際の詩篇などがまとまっている。大原さんの視野の広さは、戦争体験を抱えながら、このような手作り職人と経営者の両面を兼ね備えているからだろう。最後にタイトル詩「泪を集めて」を引用して小論を終えたい。ナシヨナリズムを煽りアジアの中で孤立していくかのような言説が流布されている現在だからこそ、大原さんの詩篇を多くの心ある人びとに読んで欲しいと願っている。大原さんの詩篇は戦争の悲しみを永遠に語り続けるのだ。

泪を集めて

何事も無い顔をした真夏の空が
今日も熱波の溶鉱炉を掻き混ぜたように
沸き立てて果てしなく広がる

更に追い打ちをかけて原子放射能の恐怖が
姿も見せず警鐘の音さえ潜めたまま

心臓の鼓動に波うつとき

東北の空を いや此の国の全ての空域を

隙間なく核の放射能で覆い尽くそうと企てる

広島 長崎に炸裂した原子放射能の惨劇の
十数倍にも勝る死滅の空間に追いたてられ
全ての物を放置し去り 意に反する遠隔地に
避難の場所を求めてさ迷う原発難民の方達

二〇一一年三月一日 東日本を襲った

あの大地震と大津波 はたして

天災とばかり言いきれぬだろうか

地球温暖化に伴う予期せぬ集中豪雨

年ごとに度を上げてゆく異常高温

春と秋が消されてゆく季節の衰亡

人間の限らない欲望の前に 破壊された

オゾン層の崩壊にあると言われる昨今
原子核の発見とその使用は

人類最大の不幸とささやかれている

塗炭の淵に慟哭する被災者の方達

放射能難民の方のなげきと苦悩

潰れるほど握り締めた拳の上に流した泪
悔し泪は流れるだけ流すがよい

共有する泪を掻き集めて立ち上がるう

復興と言う大義名分に隠れて

言葉は遊び呆けて霧の中

許すな原発 核の廃絶

その上に筑き上げた復興の花こそ

未来永劫に変わることはない

桃源の里に爛漫と咲き誇るだろう

大原勝人詩集 『泪を集めて』 葉解説文
鈴木比佐雄

コールサック社
2012